第21回
函館港イルミナシオン映画祭
第19回シナリオ大賞
函館市長賞〔グランプリ〕

時子

よしおよしたか

2015

【作者プロフィール】

よしお　よしたか

本名、謝花喜天（ざはなよしたか）

１９７４年兵庫県生まれ。幾つかの職を経て現在は福祉交流センターに勤務するかたわら、唐突に映画作りのワークショップに参加する等して右往左往と脚本の勉強中です。

【梗概】

杉田真理子は石黒伸夫からの連絡を受け、函館に戻ってきた。ホームレスになっていた岡崎武史が暴行を受けて入院したというのだ。

病院に着くと、宮部小一郎が待っていた。四人そろって会うのは、三十年ぶりだった。

弁護士の東野がやってきて、加害者の代理人として見舞金を渡そうとする。真理子が受け取ろうとすると、東野は真理子達と武史との関係を問うた。真理子達は、三十年前の不思議な出来事について、語り始めた。

当時十歳だった武史は、遊びで拾ったマッチに火をつけた。すると不思議な少女が現れた。『時子』と名乗る少女は、母に会うために『生きる力』を分けて欲しいと頼んだ。武史達は時子と遊ぶ度に力を分けてやった。力をもらう度、時子の外見は美しくなった。

時子には不思議な力があり、小一郎の病弱な妹・小雪を救い、武史達を空中散歩に誘ったりした。しかし真理子は時子の不気味さがやや不安だった。

時子は三月二十一日に母に会うから、力が欲しいと言ってきた。その日は昭和九年の函館大火が起こった日。時子は遂に正体を現し、大火の幻影を起こして武史の力を奪おうとするが、炎に焼かれて消えてしまう。

多くは語らないが、その後の武史の人生はうまくいかず、今はホームレスになっ

ている。真理子も伸夫もそれぞれ悩み多き四十歳を過ごしている。小一郎は平凡な日々を受け入れている。三十年前の強烈な体験を胸に秘め、それぞれの道を生きている大人達。時子は力を奪うだけだったが、私達は分け合えるから、と真理子は、武史に手を差し伸べた。その手に触れ、涙した武史は、助けて欲しいと言った。三十年ぶりにそろった四人はしっかりと抱きしめ合い、力を分け合って生きていこうと強く思うのだった。

【人物】

岡崎　武史（40）（10）ホームレス
杉田真理子（40）（10）武史の同級生
宮部小一郎（40）（10）武史の同級生
石黒　伸夫（40）（10）武史の同級生

東野　智之（26）　弁護士

時子　（6）　不思議な少女

宮部　小雪（4）　小一郎の妹

用務員　（69）
生徒A
生徒B

吉川　博昭（51）　武史達の担任

○**オープニング**

真っ黒な画面。走る新幹線の音。

中央に小さな光。徐々に大きくなる。

○**新幹線・実景**

まだ雪の残る町を走り抜ける新幹線。

○**新函館北斗駅・外観**

○**同・ホーム**

到着する新幹線。

シンプルなコート姿に小ぶりのバッグを持った杉田真理子（40）、降車して辺りを見渡す。

安物のブレザーのポケットに手を入れ、寒そうに立っている石黒伸夫（40）、真理子を見て無愛想に片手を上げる。

髪はボサボサでメガネがずれている。

真理子、無表情に伸夫に近付く。

伸夫「変わってなかったんだな。番号」

真理子「面倒だから」

伸夫、苦笑して歩き出す。

真理子「昨日？」

真理子、伸夫の後に続く。

伸夫「二十年ぶりの実家。真理子んちは？」

真理子「最後は九州で定年。乗り換えこっち？」

伸夫「こっち。転勤族の子供は大変だな」

真理子「気楽でいいわよ」

伸夫「浅い付き合いが丁度いい、か」

真理子「皮肉？」

ホームから去る真理子と伸夫の後ろ姿。

○個人病院・外観

真理子と伸夫、歩いてくる。

○同・廊下

伸夫、個室のドアの前で立ち止まり、真理子を見る。

真理子「大丈夫。話は聞いてる」

伸夫「そうは言ってもな」

伸夫、ドアを開ける。

○同・病室・中

真理子と伸夫、そっと入る。

ベッド上の人物、シーツに潜り込む。

ベッド横のイスに座って真理子を見る、小太りの宮部小一郎（40）。

小一郎、屈託ない笑顔で

小一郎「久しぶり。変わってないね」

真理子「それも皮肉？」

小一郎「え？」

真理子「何でもない。小一ちゃんこそ変わってないね」

小一郎、腹を叩いて

小一郎「でもこれがね」

真理子「そこ、一番変わってないから」

真理子、ベッドに視線を移す。

小一郎、ベッドに向かって静かに

小一郎「武史、真理子も来てくれたよ」

ベッドの人物、動かない。

伸夫「見て損はない。三十年ぶりだ。それ

なりの見た目になっている」
真理子「ちょっと」
小一郎「そんなことない。面影は十分」
真理子「フォローになってない」
　岡崎武史（40）、シーツをゆっくりずらし、真理子の方へ体を向ける。
真理子「……」
　武史の白髪混じりの髪、やつれた顔。頭と片目に包帯。
伸夫「これで随分マシになったんだぜ。全身洗いまくって、ヒゲ剃って、着替えさせて」
　真理子、言葉を発しようとするが
小一郎「よかった、普通の人に見える、ホームレスには見えない、って、言いたい？」
　真理子、口をつぐむ。
伸夫「やっぱり変わってないな。でも、それがいい」
　小一郎、微笑んでうなずく。
　真理子、首を横に振ってうつむく。
　武史、再び背を向けてシーツに潜る。
真理子「……」
　ドアがノックされ、そっと開く。
　東野智之（26）、恐る恐る顔を出す。
東野「あの、よろしいでしょうか？」
小一郎「どうぞ」
　東野、入ってきて室内を見回しながら
東野「あのう、私、先日、岡崎様にご迷惑おかけしたお子さん達の代理で参りました。東野と申しますが……」
　東野、名刺を出すが誰に渡そうか迷

う。

真理子、歩み寄り名刺を受け取る。

真理子「ご用件は？」

東野「あのう、この度は本当に岡崎様にご迷惑おかけいたしまして――」

真理子「それはいいから」

東野、オドオドしながら

東野「あ、はい、それでですね、どうお詫びをしたら良いものやらということで、その、岡崎様、失礼ながら生活にお困りのご様子ですので、何と申しますか」

東野、汗を拭く。

東野「このような形でお詫びさせていただくのが一番お役に立てるのではないかということになりまして……」

東野、厚みのある封筒を取り出すが、誰に渡すか迷う。

真理子が手を出すが、東野は封筒を引っ込める。

東野「失礼ですが、ご家族の方ですか？」

真理子「とんでもない」

東野「そうですか、あの、こういうものはご本人様かせめてご親族の方でないと――」

真理子、武史を見る。

武史、身動きしない。

真理子、東野を見て

真理子「彼、受け取る気なさそうよ」

伸夫「家族とは絶縁状態」

小一郎「僕達は友人です」

東野、困って

東野「そうですか、えっと、あの、それで

は皆様、どういったご友人で？」

小一郎「え？　どういった友人かって……」

小一郎と真理子、伸夫、顔を見合わす。

真理子「私達は……」

真理子、シーツの中の武史を見つめる。

武史、ジッとしている。

微かに聞こえてくる、鈴の音。

○小学校・外観（夜）（回想）

以下「（回想終わり）」まで回想続く。

賑やかな音楽。

○同・校庭（夜）

クリスマス会が行われている。

家族や友達と楽しんでいる生徒達。

○同・校舎裏（夜）

駆けてくる岡崎武史（10）、杉田真理子（10）、宮部小一郎（10）、石黒伸夫（10）。

立ち止まる。

伸夫「で、武史、何だよ？」

真理子、小一郎、伸夫、武史を囲む。

武史「ジャーン」

武史、ポケットからマッチ箱を出す。

武史「校門の隅っこで発見しましたーっ！」

小一郎「おーっ！」

伸夫「つけようぜ、つけようぜ！」

真理子「気をつけてよ」

武史「わかってるよ」

武史、しゃがむ。真理子、小一郎、伸夫、続いてしゃがむ。

武史、マッチ棒を一本擦る。
火が灯り、一瞬揺らめく。
少女の声「(か細く)お願い！」
火が消える。
武史、真理子、小一郎、伸夫、顔を見合わせる。
小一郎「今、何か……」
伸夫「聞こえたよな？」
武史「もっかいやってみよう」
武史、マッチ棒を擦る。火が灯り、
少女の声「(はっきりと)お願い！」
武史、マッチ棒を落として弾かれたように立ち上がる。
真理子、小一郎、伸夫も立つ。
伸夫「な、何だよ！」
小一郎「絶対聞こえた！」
真理子「やだ！　もう！」
武史、真理子をにらんで
武史「お前じゃないだろうな？」
真理子「は？　何でよ？」
武史「そんなんでビビるかよ！」
真理子「私じゃない！」
小一郎が武史と真理子の間に入る。
小一郎「やめろって」
伸夫「なあなあ、もっかいやって確かめようぜ。真理子、口、ふさいどいて」
真理子、武史をにらみつけて
真理子「わかった。絶対私じゃないから。ちゃんと確かめてよね！」
武史「おう。しっかりふさいどけよ」
真理子「わかってるわよ」
武史、真理子、小一郎、伸夫、円陣

を組んで息を潜める。
真理子、両手で強く口を抑える。
武史、ゆっくりマッチ棒を擦る。
真理子、小一郎、伸夫、炎を見つめる。
円陣の中央に現れる、少女の影。
武史、真理子、小一郎、伸夫、驚く。
少女「私は……時子……時子！」
武史、マッチ棒を放り投げて逃げ出す。
真理子、小一郎、伸夫も逃げる。
伸夫、メガネを落として慌てて拾う。
武史「お化けだ！」
真理子、小一郎、伸夫「お化けだ！」
雪の上に、マッチの燃えかす。

○公園

武史と真理子以外、誰もいない。
武史と真理子、鉄棒を掴んでぶら下がったり、もたれたりしている。
武史「遅いな小一ちゃん」
真理子「おうち手伝ってんじゃない？」
武史「もう跡継ぎの練習かよ」
真理子「ただのお手伝いでしょ」
武史「お前は気楽でいいよな。親の転勤で色んなとこ行けるんだもんな」
真理子、口をキュッと結んで答えない。
武史「伸夫は最近塾ばっかだし。ヒマだなあ」
真理子「武史の方が自由でしょ。お父さんもお母さんも全然家にいないって聞いたよ」

武史、そっぽを向く。その後ろ姿。
小一郎の声「(遠くから)ごめんごめーん」
武史と真理子、声の方を見る。
小一郎、遠くから必死に駆けてくる。
武史、笑顔になって手を上げる。
武史「おう!」
小一郎、武史と真理子に駆け寄る。
武史「持ってこれた?」
小一郎「(息荒く)うん、俺んち、食堂だから」
小一郎、ポケットからマッチ箱を取り出し、武史に渡す。
武史「サンキュー」
武史、すぐに火をつけようとする。
真理子が慌てて
真理子「ちょっと待って!」
真理子、周囲を確認し、隅っこへ走る。
武史と小一郎、真理子に続く。
真理子「さ、早く」
武史「よし」
武史、マッチ棒を擦る。
真理子と小一郎、固唾を飲んで見守る。
火がつくが、何も起こらない。
武史、真理子、小一郎、見つめ合う。
火が消える。武史、2本目を擦る。
何も起こらない。
武史「ダメだ」
小一郎「……学校じゃないとダメなのかな」
真理子「時間かも」
武史「夜ってことか?」
武史、真理子、小一郎、見つめ合う。
小一郎「どうする?」

武史「俺は大丈夫だけどさ……」
武史、真理子を見る。
真理子「……言い訳、考えなきゃ」
武史「……」

○小学校・校舎裏（夜）

円陣を組んで互いに見つめ合っている武史、真理子、小一郎、伸夫。
真理子はノートと筆記用具を持っている。小一郎はランドセルを背負っている。伸夫は天体望遠鏡を持っている。
武史「じゃあ、いいか？」
真理子、小一郎、伸夫「うん」
真理子、小一郎、伸夫、それぞれの荷物を脇に置く。
武史、足元の場所を整える。
真理子「伸夫くんが天体マニアでよかった。一緒に星座観測するって言ったら、即OKだったよ」
小一郎「将来は学者さんになるんだよね？」
伸夫「勿論。小一ちゃん、何でランドセル？」
小一郎、得意げに
小一郎「この方が説得力、あるでしょ？」
伸夫「え、いや、うん」
武史「早くしろよ」
真理子、小一郎、伸夫、慌てて武史のそばに寄る。
武史、マッチを擦る用意をする。
真理子「いいよ」
武史、頷いて、マッチを擦る。
真理子、小一郎、伸夫、火を見つめる。

炎が大きく揺れ、少女の影が現れる。
武史の手が震える。
真理子「落としちゃダメ」
真理子、武史の手を掴む。
武史、ジッとこらえる。
少女、時子（6）の姿が現れる。
短めでボサボサのおかっぱ頭、所々燃えたように破れているボロボロの着物。
武史、マッチの燃えかすを落とす。
火が消えるが時子は消えない。
真理子、あ然として少女を見つめる。
小一郎、武史の背後に隠れる。
伸夫、逃げようとして自分の望遠鏡につまずいて転ぶ。
武史、後ずさるが小一郎につっかえる。
武史「お、お前……えっと、誰だっけ」
真理子、小一郎の背後に隠れながら
真理子「時子。と、き、こ」
武史「そうだった。おい、時子、お前、お化けか？」
時子、武史を見つめる。その澄んだ瞳。
武史、時子の瞳に見とれる。
真理子「……」
伸夫、立ち上がって土を払う。
武史「おい、何か言えよ」
時子「お化け？」
時子、武史に近づいて首をかしげる。
武史、後ずさるが小一郎につっかえる。
武史、小一郎を押しながら

武史「小一ちゃん、邪魔だってば！」
小一郎「だだだだだって」
　時子、楽しそうに笑う。
　武史、真理子、小一郎、伸夫、時子を見て少し肩の力を抜く。
真理子「何しに来たの？」
時子「お母さんに会うの」
真理子「お母さん？　どこにいるの？」
時子「わかんない。でも、きっと、もうすぐ会えるの」
真理子「いつ？」
時子「わかんない」
武史「お前、何にもわかんないんだな」
　小一郎、武史の肩越しに
小一郎「お母さんと、どうやって会うの？」
　時子の瞳が一瞬輝く。
時子「わかんない。でも、手伝って欲しいの」
　伸夫、望遠鏡が壊れていないか確認しながら
伸夫「手伝うって、何をどうやって？」
　時子、ゆっくりと掌を武史に見せ、そのままジッとする。
武史「え？」
　武史、戸惑ってから、ゆっくり腕を上げて、掌を時子に合わせる。
　二人の掌が触れた瞬間、武史はブルッと体を震わせ、掌を離す。
　武史、照れ隠しに笑う。
真理子「……」
　時子、ふと真理子を見て、笑う。
真理子「……」
　時子の髪が少し輝く。

伸夫「何だよ、ブルッって」
小一郎「照れてるんだ」
武史「違う！」
　武史、小一郎、伸夫、小突き合う。
　それを見て笑顔の時子。
真理子「……」
伸夫「怪しいぜー」
武史「違うって言ってんだろ！」
時子「また会ってね」
　時子の体が透け始める。
　武史、真理子、小一郎、伸夫、驚く。
時子「また、力を分けてね。生きる力を」
真理子「生きる、力？」
　時子の姿、消えそうになる。
武史「また会うって、どうやって？　ここでまたマッチ燃やせばいいのかよ？」
　時子、完全に消える。
時子の声「わかんない」
　武史、あちこちを見回し
武史「ったく、お前ホントに何にもわかんないんだな！」
　静寂。
　伸夫、空を見つめる。満天の星空。
　武史、小一郎、伸夫も空を見上げる。
小一郎「消えちゃった」
真理子「また、会う？」
武史「会うしかないだろ。助けて欲しいって言ってたし」
小一郎「あの時、どんな感じだった？」
武史「うん……何か、フワッて感じがした」
真理子「ふうん」
伸夫「あ」

天から降ってくる数粒の雪。

武史「……」

○函館市・実景

夜が明ける。

人々が活動を始める。町の日常。

夕方になる。

○杉田家・玄関（夜）

ドアが開き、トートバッグを持った真理子が出てくる。

母の声「あんまり遅くならないでねー」

真理子「うん」

真理子、ドアを閉め、歩き出す。

○石黒家・玄関（夜）

ドアが開き、望遠鏡を担いだ伸夫が出てくる。

父の声「今日も観測日和だなー」

伸夫「うん」

伸夫、ドアを閉め、歩き出す。

○宮部食堂・表（夜）

ガラスの引き戸から漏れる明かり。

戸が開き、ランドセルを背負った小一郎が出てくる。

小一郎「行ってきまあす」

母の声「行ってらっしゃあい」

小一郎、戸を閉めて歩き出す。

○小学校・校門（夜）

真理子が駆け込む。

伸夫が駆け込む。

○同・校舎裏（夜）

武史、うつむいてウロウロしている。

真理子と伸夫が駆けてくる。

武史、嬉しさを隠しながら

武史「遅いぞ」

伸夫「ごめんごめん」

真理子「小一ちゃんは？」

武史「まだ」

真理子「始めちゃう？」

武史「待つよ。仲間なんだから」

伸夫「じゃあその間」

伸夫、望遠鏡をセットし始める。

伸夫「冬の星座は最高にきれいだからな」

真理子「冬の星座って、何があったっけ」

伸夫「オリオン座はと座いっかくじゅう座エリダヌス座……」

武史「えりがんすだ？」

伸夫「エリダヌス座」

伸夫、望遠鏡をセットし終わる。

真理子「えっと……やっぱり伸夫はすごいってことはよおくわかった」

武史「そんなのずーっと前から俺知ってるぞ」

真理子「引っ越してきてまだ3ヶ月ですけど」

武史「ったく、転勤族は面倒くさいんだ」

真理子、武史の頭を叩く。

小一郎の声「（遠くから）ごめんごめーん」

武史、頭を撫でながら
武史「遅いよ小一郎！　お前のせいだぞ！」
小一郎、駆け寄ってきて
小一郎「何が？」
真理子「気にしないで」
伸夫「よし、やろうぜ！」
武史「お、おう」
武史、真理子、小一郎、伸夫、円陣を組む。
武史、ポケットからマッチを取り出す。
小一郎、唾を飲み込む。
武史、マッチを擦る。
真理子、小一郎、伸夫、息を止めて見守る。炎が揺れる。
時子が現れる。髪がボサボサ。
真理子、小一郎、伸夫、息を吐き出す。
武史、笑顔になりかけるがこらえる。
時子、無表情に武史、小一郎、伸夫を順番に見つめる。その黒い瞳。
武史、小一郎、伸夫、照れる。
時子、真理子を見つめる。
真理子「……」
時子、不意に笑う。
真理子、ハッと身を固くする。
時子「遊ぼ！」
武史、小一郎、伸夫、元気になって
武史、小一郎、伸夫「おう！」
時子「かくれんぼ！」
武史「よし！　て、誰が鬼やるんだ？」
時子「時子が鬼ーっ」
武史「オッケー。逃げろ！」

武史、走り去る。小一郎、伸夫、続く。

真理子、戸惑う。

時子、真理子を見て微笑む。

時子「真理子ちゃんも、一緒に遊ぼ」

時子の屈託ない笑顔。

真理子、肩の力を抜いて笑う。

真理子「うん」

真理子、走って隠れ場所を探しに行く。

時子、壁に顔を伏せて数を数える。

十数え終わると、ふっと消える。

茂みの中でしゃがんでいる小一郎。

時子、小一郎の背後に急に現れる。

時子「小一郎、見っけ」

小一郎、慌てて振り返る。

時子、小一郎の肩に触れる。

小一郎、ブルッと震える。

小一郎「？」

時子の髪が少しきれいになる。

時子、笑う。

小一郎「……」

時子「小一郎が、鬼ーっ」

武史の声「どんくさいぞ小一ちゃん！」

時子、不意に走り去る。

小一郎、慌てて立ち上がる。

× × ×

かくれんぼを楽しむ武史、真理子、小一郎、伸夫、時子。

× × ×

時子、時々姿を消したり不意に現れたりする。

× × ×

武史、真理子、小一郎、伸夫、時子に触れられる度にブルッと震える。

×　×　×

時子の髪、美しく艶やかになっていく。

×　×　×

武史、時子を両腕に抱えて高く持ち上げる。笑う時子。

武史「時子、お前、あだ名とかあるの？」

時子「お時」

武史「そっか。お時、かあ。じゃあ、俺達もお時って呼んでいい？」

時子「いいよ！」

伸夫、武史と時子を望遠鏡で覗く。

レンズ越しに見えるのは武史だけ。

伸夫「？」

伸夫、レンズから顔を離す。

小一郎が時子を持ち上げる。

小一郎「よおし、じゃあお時、今度は僕の番」

小一郎、軽々と時子を持ち上げるが、勢いがつきすぎて倒れそうになる。

時子「きゃー」

小一郎、体勢を整え、時子を掲げたまま回転する。

伸夫、もう一度望遠鏡を覗く。

レンズ越しに見える、一人でクルクル回っている小一郎。

伸夫「……」

武史、伸夫を見て

武史「伸夫、お前もやってみろよ！」

伸夫、気を取り直して時子のそばへ駆け寄る。時子を持ち上げようとす

るが、うまくできない。
武史「へたくそ！」
伸夫、何とか時子を持ち上げるが小一郎のようには回れない。2、3度ふらついて、たまらず時子を降ろす。
伸夫「ダメだー。小一ちゃん、すごいな」
小一郎、胸を張って
小一郎「僕、小雪がいるからね。妹扱いには慣れてるんだ」
武史「そうだ、小雪、具合どう？」
小一郎「うん。まあまあ」
武史「そっか」
時子、無表情に話を聞いている。
真理子、ハッとして腕時計を見る。
真理子「遅くなっちゃった！」
伸夫「わー」
伸夫、望遠鏡の所へ走り、急いで片付け始める。
武史、一瞬うつむき、パッと顔を上げ
武史「お時、また明日な」
真理子「え、私、明日は無理かも」
伸夫、望遠鏡を担ぎながら
伸夫「俺も。塾あるし」
武史、小一郎を見る。
小一郎「うーん、俺も食堂あるし。小雪もいるし。次は……お正月かなあ」
武史、何か言いかけるが
伸夫「それでいいよ。どうせすぐだし」
真理子「うん。じゃあ、お時、年が明けたらね。年末は忙しいもん」
武史、時子を見る。

時子「うん。いいよ。またね」
　武史、時子に一歩近寄って
武史「そうだ！　お時、力を分けて欲しいって言ってたよな？　まだ分けてないぞ」
　時子、一瞬異様な雰囲気でニヤリと笑う。それを見た真理子、ハッとする。
　時子、すぐに普通に戻り
時子「大丈夫。今日はもう、いっぱいもらったから。また今度でいいよ」
　時子、消え始める。
武史「あ」
時子「また、みんな一緒に、会って遊ぼうね」
　時子、完全に消える。
武史「……」
　小一郎、武史に近寄り
小一郎「武史、帰ろ」
武史「……」
　真理子、校門に向かって走り出す。
真理子「早く！　怒られちゃう！」
　伸夫も駆け出す。
　武史、息を一つ吐いてから、小一郎の肩を軽く叩く。
武史「食堂は年末忙しいんだろ？」
小一郎「だといいんだけど」
　武史、笑顔で
武史「じゃあ、正月にまたお時と遊ぼ」
小一郎「うん」
　武史、急に駆け出して
武史「小一ちゃん、ダッシュ！」
小一郎「ええっ！　ちょっと待って！」
　小一郎、慌てて武史を追う。
（回想終わり）

○個人病院・病室

岡崎武史（40）、頭からシーツを被ってもぐりこんでいる。

静かにイスに座っている宮部小一郎（40）。やや微笑んでいる。

杉田真理子（40）、呆れた表情で腕組みして壁にもたれている。

石黒伸夫（40）、真理子と反対の壁にもたれてニヤニヤしている。

東野智之（26）、床にあぐらで座り、泣いている。

真理子「何でよ」

東野、涙を拭いながら

東野「だって、だって、美しいじゃないですか！　素晴らしいですよ！」

真理子「何が？」

東野「いやあ、子供時代って、本当に輝いてるもんですよねえ！　純粋な青い日々！」

伸夫、苦笑しながら

伸夫「お時の異常性については何にも思わないの？」

東野「今のところですね、僕が思うに、お時は、天使ですね。絶対。純粋な少年少女達に天が遣わした奇跡の証ですよ。ええ」

伸夫「そんな簡単に決めちゃっていいのか？　よくそれで弁護士やってられるねえ」

東野「美しい……実に美しい……僕もお時に会いたかったなあ」

東野、勝手にうなずきながら涙を拭う。

小一郎、武史を見つめる。
小一郎「でも、あの時は、僕も本当にお時は天使だと思ったな」
真理子、表情を和らげ
真理子「あの時って、あの時ね。私も思った」
真理子、武史を見つめる。
真理子「もっと良くなって欲しいって願っている何かを、どうにかしてくれるんじゃないかって。お時にはそんな力があるんじゃないかって。そう思った」
伸夫「そりゃあ、あんなことされちゃあな。奇跡ってのは本当にこの世にあるもんなんだって、さすがの俺も思ったよ」
東野、身をよじりながら
東野「も、もーお、勿体ぶらないで何があったのか早く話してくださいよお」
小一郎、笑ってから
小一郎「あの後みんなで集まることができたのは、結局新学期が始まってからだった」
伸夫「俺は塾で忙しかったし、小一ちゃんは家の手伝いがあったし、真理子もそうそう毎晩出歩く訳にはいかなかった。一応女の子だったしな」
伸夫、真理子に両手を上げてみせて
伸夫「おっと、怒らないでくれよ」
真理子、作り笑いで
真理子「慣れてます。その扱い」
東野、じれったそうに
東野「ううん、もおーっ、早くー」
真理子、小一郎、伸夫、脱力して笑う。
真理子「はいはい」

東野「お時の奇跡って、何なんです？」
　小一郎、武史を見つめながら
小一郎「小雪を救ってくれたんだよ。でも
　その前に……」
　小一郎、武史から目をそらさない。
東野「その前に？」
伸夫「武史は、待てなかったんだ」
真理子「一人でお時に会ってたの」
東野「ええっ？　どうやって？」
真理子「少し力がついてたみたいで、お時
　はマッチの火をつければいつでも、どこ
　でも現れるようになってたの」
　東野、武史を見て恐る恐る
東野「抜け駆けして、逢いびき、ですか」
　真理子、笑って
真理子「当時は私もそう思ったわ」
東野「今は違うんですか？」
　真理子、武史を見る。
　シーツにくるまる武史の丸い背中。
×　　×　　×
（回想）
夜の公園で、真剣な表情で一人マッ
チを擦る岡崎武史（10）。
時子（6）が現れる。
武史の顔に広がる笑み。
×　　×　　×
武史、一層身を縮こめる。
真理子、目を伏せる。
　シーツにくるまる武史の丸い背中。
武史の声「なあお時。お母さんに会って、
　どうすんだよ？」
時子の声「ただ会いたいの」

○公園（夜）（回想）

以下「（回想終わり）」まで回想続く。

岡崎武史（10）と時子（6）、木登りをしている。

時子、艶やかで美しいおかっぱ頭。少しきれいになった着物姿。

武史「ムリして会わなくてもいいよ。親なんて、大したことない」

時子、首を横に振って武史を見る。

時子「嫌！　お母さんに会うの！」

時子、武史を見つめたまま泣き始める。

武史、時子に見とれる。

武史「俺、ヒマしてるから毎晩会えるよ。だから、寂しくないだろ？」

時子、イヤイヤしながらうつむく。

武史も少しうつむいて、

武史「ごめん、お時、そんなにお母さんに会いたいんだ。お時は、お母さん、大好きなんだな」

時子、顔をパッとあげて笑顔になる。

時子「そう！　お母さん、大好き！」

武史、優しく微笑む。

武史「お時のお母さんは、きっといい人なんだろな」

時子「うん！」

武史、時子から目をそらす。

武史「……」

時子、笑うのをやめて首をかしげる。

時子「どうしたの？」

武史、木から飛び降りる。時子を見上げて、笑ってみせる。

武史「何でもないよ！　さ、お時、俺の力を分けてやるよ」

時子「うん！」

時子、ジャンプする。

ふんわりと地面に舞い降りる。

武史、掌を時子にかざしてみせる。

時子、掌を武史の掌に合わせる。

時子の瞳が輝く。

武史、目を閉じて小さく身を震わせる。

時子の唇、赤みを増して艶やかになる。

武史、大きく深呼吸して、時子を見る。

時子、笑みを浮かべながら武史を見る。

武史、時子に見とれる。

小一郎の声「ええっ？」

真理子の声「ずっと一人で会ってたの？」

○小学校・教室

休み時間。生徒達が思い思いに喋ったり遊んだりしている。

窓の外は雪が降っている。

集まっている武史、杉田真理子（10）、宮部小一郎（10）、石黒伸夫（10）。

武史「ずっとじゃない。二、三回だよ」

真理子「会って、何してたの？」

武史「別に何も。ただ遊んでただけ」

小一郎「何して遊んだの？」

武史「何って……木登りとか、お手玉とか」

真理子、武史に食ってかかる。

真理子「みんなで一緒にって約束したじゃ

ん」

　伸夫、真理子を制して

伸夫「そんなことより」

　武史、真理子、小一郎、伸夫を見る。

伸夫「お時、力を分けてって言ってたよな？」

真理子「うん。生きる力」

武史「うん。分けてあげた」

伸夫「毎回？」

武史「毎回」

伸夫「……大丈夫？」

武史「何が？」

伸夫「だって……生きる力をあげるってことは、武史の力がその分減るんじゃないか？」

武史「そんなことない」

　真理子、小一郎、顔を見合わせる。

　武史、腕をまくり、体のあちこちを激しく動かして、伸夫に見せつける。

武史「ほら！」

小一郎「生きる力って、そういうことじゃないんじゃ」

武史「文句あんのかよ」

　武史、小一郎にも食ってかかる。

真理子「やめて。くだらない」

武史「くだらないって、何だよ」

　武史、真理子をにらむ。

真理子「会って確かめればいいじゃない。お時に直接聞こうよ」

伸夫「そうしようぜ」

　小一郎、モジモジする。

武史「何だよ。トイレ？」

小一郎「違う」

武史「じゃあ、何だよ」
　小一郎、ためらってから
小一郎「僕、しばらく遊べないよ」
真理子「何で？」
　武史、ハッとする。
武史「大丈夫か？」
　小一郎、驚いて、でも少し嬉しそうに
小一郎「大丈夫。ちょっと具合よくないだけ」
伸夫「小雪のこと？」
　武史、真理子、伸夫、小一郎に寄り添うように、距離を縮める。
真理子「お見舞い、いってもいい？」
小一郎「うん。ありがとう。どうかな、ちょっと熱が下がらなくて」
武史「悪いのか？」
小一郎「そんなでも。微熱だよ。それより」
　小一郎、おどけてみせて
小一郎「ワガママ言うんだよ。そっちの方が大変」
真理子「何て言うの？」
小一郎「ホタルが見たいって」
武史・真理子・伸夫「ホタル？」
　チャイムが鳴る。生徒達、席に着く。
武史「後で続き、な」
真理子「うん」
　武史、真理子、小一郎、伸夫、それぞれの席に着く。
　吉川博昭（51）、入ってくる。
生徒Ａ「起立」
　生徒全員、起立する。
生徒Ａ「礼……着席」

生徒全員、座る。

吉川「さ、今日は昨日の続き、二十三ページから。教科書開いて」

生徒達、教科書を開く。

武史、小一郎を見てぼんやりしている。

武史「……」

吉川「岡村！」

武史、慌てて教科書を開く。

笑い声がクスクス起こる。

吉川「いつまでも正月気分じゃダメだぞ」

武史「はあい」

吉川「じゃあそのまま、段落一個分読んで」

武史、立ち上がり、詰まりがちに教科書の音読を始める。

○同・外観（夕）

雪が降っている。

○同・校門（夕）

下校していく生徒達。その中に武史、真理子、小一郎、伸夫の姿。

○道（夕）

武史、真理子、小一郎、伸夫、雪を踏みしめながら歩いている。

真理子「積もるかな」

伸夫「かもな。そっか、真理子は函館の雪、初めて？」

真理子「うん。十二月は意外と降らないなあって思ってたんだけど」

小一郎「こっちは一月二月くらいからいっ

ぱい降るんだよ」
真理子「へえ」
武史、黙って歩いている。
小一郎、武史を見て
小一郎「どうしたの？」
武史「ああ。うん」
真理子「元気ないの？」
武史「いや……あのさ」
武史、立ち止まる。真理子、小一郎、伸夫、武史につられて立ち止まる。
武史「お時に頼んでみよっか」
真理子「え？」
伸夫「頼むって、何を」
武史「小雪のこと」
小一郎「え」
真理子「あ……ホタル？」
武史「うん」
伸夫「お時、ホタルを呼べるのか？」
武史「いや、わかんないけど……何か、できそうな感じしないか？　あいつ」
伸夫「……確かに」
真理子「そうだね……ねえ、頼むだけ頼んでみる？　ダメで元々なんだし」
武史「小一ちゃん、病院って、夜も入れる？」
小一郎「え、どうかな。でも、僕が一緒なら大丈夫じゃないかな。家族だし」
武史、真理子、小一郎、伸夫、お互いを見つめ合う。
武史「今夜、お時を連れて行こう」
真理子、小一郎、伸夫、うなずく。

○町・実景（夜）

雪化粧の夜。

○総合病院・外観（夜）

○同・廊下（夜）

暗く、誰もいない。

響く複数の足音。

角からスタスタと歩いてくる小一郎。

隣に、にこやかに歩く時子。

小一郎、時子を見て頬を緩める。

小一郎の後に続く武史。武史の背後にくっついて歩く真理子。

最後尾で怯えながら歩く伸夫。

武史、真理子を見て

武史「うっとおしい」

真理子「だって！」

小一郎、真理子を振り返り

小一郎「おっきい声出しちゃだめ」

真理子「ごめん」

小一郎「着いたよ」

小一郎、病室のドアを開け、中に入る。

時子、武史、真理子、伸夫、続いて中に入る。

○同・病室（夜）

ベッド際の電灯だけが点いている。

ベッドに横たわって目を閉じている宮部小雪（4）。

小一郎、小雪に近づく。小雪、パッと目を開く。

小雪「お兄ちゃん」

小一郎「起こしちゃった？」
小雪「ううん。起きてた」
　武史、真理子、伸夫、小雪に近づき
武史「小雪」
小雪「武史ちゃん」
伸夫「夜更かしはだめだぞー」
小雪「伸夫ちゃん」
真理子「小雪ちゃん、久しぶり」
小雪「えーっと、真理子ちゃん」
　小雪、時子を見て
小雪「だあれ？」
武史「お時。俺達の新しい友達だよ」
　時子、小雪をジッと見る。
小雪「こんにちは」
　時子、微笑んで
時子「こんにちは」
伸夫「時間的に『こんばんは』じゃないか」
小雪・時子「こんばんは」
　一同、小さく笑い合う。
　静寂。
　武史、小一郎を見て、時子を見る。
武史「お時、どう？　ほんとにできるのか？」
　時子、大きくうなずいて
時子「でも、みんなの力がいるよ」
　小雪、不思議そうに
小雪「何するの？」
武史「小雪、ちょっと待っててな」
　武史、時子を見る。
　時子、ゆっくり掌を差し出す。
　武史、時子の掌に自分の掌を乗せる。
　武史、小一郎を見る。小一郎、うなずいて掌を乗せる。武史と小一郎、

伸夫を見る。伸夫、うなずき、掌を重ねて置く。
武史、小一郎、伸夫、真理子を見る。
真理子、少しためらう。
武史、真理子の目を見てうなずく。
真理子、意を決して掌を重ねて置く。
時子、目を閉じて深呼吸する。
武史、真理子、小一郎、伸夫の体が一瞬光る。
光が時子の体に吸い込まれる。
小雪、驚いて上半身を起こす。
時子、急にカッと目を開き、顔を天井に向け、口を大きく開ける。
大量の光の粒が時子の口から溢れ出す。
光の粒が部屋中に放たれ、飛び回る。
武史、真理子、小一郎、伸夫、驚いてポカンと口を開け、光の粒を見つめる。
真理子「うそ……」
武史「すげえ」
小雪、笑顔で宙を指差し
小雪「ホタルだ！」
小一郎「ほんとだ！」
伸夫「すげえ、すげえ、すげえすげえ！」
武史、真理子、小一郎、伸夫、重ねていた掌を離し、ガッツポーズする。
武史、真理子、小一郎、伸夫「うおーっ！」
武史、真理子、小一郎、伸夫、光の粒を追いかけて捕まえる。手にとって眺めたり、解き放ってみたりする。
小一郎、集めた光の粒を小雪に渡す。

小雪、両手で光の粒を受け取る。その手の中でフワフワと浮かぶ光の粒。数粒がフワッと舞い上がり、小雪の鼻や口から体内に入る。

小一郎、驚く。

小一郎「小雪！　大丈夫？」

小雪、平然と

小雪「大丈夫だよ」

小一郎、時子を見る。

時子、ニヤリと笑って、天井を向いて口を大きく開く。

光の粒が時子の口にどんどん吸い込まれていく。

時子、全ての粒を吸い終わり、身震いする。急に髪が肩まで伸びる。

武史、真理子、小一郎、伸夫、呆然と時子を見つめる。

時子、微笑んで武史、真理子、小一郎、伸夫を見る。

時子「後は、その日を待つだけ」

武史「その日？」

時子「あと少し。あと少し」

時子の姿、消えていく。

窓から朝日が差し込んでくる。

武史、真理子、小一郎、伸夫、時子が立っていた場所をジッと見つめる。

武史「……」

真理子「その日、って……」

伸夫「……お母さんに会う、日？」

何かが跳ねる音。

小一郎、音のする方を見る。

小雪がベッドの上で飛び跳ねている。

小一郎、涙目になり、小雪に近づき抱きしめる。

武史、真理子、伸夫、小一郎と小雪を見て、お互いを見つめ合い、時子が立っていた場所を見る。

武史「……」

東野の声「奇跡……マジ奇跡！」

（回想終わり）

○個人病院・病室

岡崎武史（40）、シーツに潜ったまま。

東野智之（26）、恍惚としている。

東野「お時すげえ」

杉田真理子（40）、東野を無視して、

宮部小一郎（40）に向かって

真理子「小雪ちゃん、元気？」

小一郎「今や3児の母だよ。圧倒される。あ」

小一郎バツの悪そうな顔。

真理子、手をひらひらさせて

真理子「いいわよ。変な気使わないで」

小一郎「ごめん。でも、モテそうなのに」

真理子「モテるわよ」

小一郎「ああ、そう」

東野、遠慮がちに

東野「杉田さんは、その、独身で？」

真理子「そう」

東野「（やや嬉しそうに）そうなんだ」

真理子「断る」

東野、うなだれる。

石黒伸夫（40）、真面目に

伸夫「こう見えて人付き合いがヘタなんだよな。真理子も」

真理子、苦笑する。
東野「でも、皆さんずっと仲良しなんですよね？　うらやましいなあ」
真理子「……」
東野「あれ？」
小一郎「四人そろったのは三十年ぶりだよ」
東野「三十年……三十年て、じゃあ、え？」
伸夫「そう。お時と会って以来」
小一郎「別々で会うことはあったけど……何故だか、そろわなかった」
伸夫「特に武史が」
真理子、小一郎、伸夫、武史を見る。
真理子「いい加減に、自分を哀れむのはもうやめたら？　どうにもなりゃしないわよ」
小一郎「真理子」
真理子、そっぽをむく。
東野、遠慮がちに、でも興味津々で
東野「もしかして、岡崎さんがこうなっちゃったのは。お時のせいなんですか？　その、生きる力をあげちゃった、ていう」
真理子、そっぽを向いたまま
真理子「違うわ」
東野「じゃあ……どうして」
真理子「本人に聞きなさい。私も知りたいわ」
小一郎、静かに
小一郎「多分、お時のせいじゃないと思うよ」
伸夫「武史だけじゃない。もっと言えば、俺達だけじゃない」
伸夫、立ち上がって窓に近づく。
伸夫「お時のせいじゃないよ」
東野、不思議そうな顔。

東野「その後、お時はどうなったんですか？　お母さんには会えたんでしょうか？　最後はどんな風に別れたんですか？」

武史、シーツからほんの少し顔を出す。

武史「……」

○公園（朝）（回想）

以下「（回想終わり）」まで回想続く。

よく晴れた青い空。

地面には大量の雪が積もっている。

岡崎武史（10）、一人でうろついている。時子と登った木の幹を何度も叩く。

武史「……」

武史、立ち去る。

○小学校・校舎裏

武史、雪の上に寝そべっている。

真理子の声「見つけた」

杉田真理子（10）がやってくる。

真理子「どうしたの最近」

武史、顔を背けて

武史「どうもしない」

真理子「うそ」

武史、真理子に背を向ける。

ズボンのポケットから覗く、マッチ箱。

真理子「……」

真理子、武史の正面に回り込み

真理子「お時と会ってる？」

武史、また真理子に背を向ける。

武史「関係ないだろ」

真理子、武史の正面に回り込み
真理子「会えてないの？」
武史、真理子に背を向ける。
真理子、武史の正面に回り込む。
真理子「後はその日を待つだけって言ってたじゃん。お母さんに会う日まで、出てこないんじゃないかな？」
武史、ムッとして体を起こす。
武史「いい加減にしろよ」
真理子「だって……何か元気ないから」
武史「ほっとけよ。お前、どうせまた転勤でどっか行くんだろ？　小一ちゃんは家族みんなで仕事してるし、伸夫は勉強があるし、お時だってどうせどっかへ消えちゃうんだし、俺のことなんかほっとけよ」
真理子、言い返そうとする。
武史、真理子に背を向けて寝転がる。
真理子「……」

○同・教室

休み時間。賑やかな様子。
武史、真理子、小一郎、伸夫、集まっている。武史、心ここに在らずという様子。真理子、武史を見つめる。
宮部小一郎（10）、嬉しそうに
小一郎「小雪、もう全然大丈夫なんだ。それで今夜、多分連れて行けると思うんだけど」
石黒伸夫（10）、怪訝そうに
伸夫「どこに？」
小一郎「お時と遊びに」

武史、小一郎を見る。
伸夫「そっか！　ホタルから会ってないな」
真理子「でも……」
　真理子、武史を見る。
　武史、うつむいて
武史「あいつ、もういないんじゃないか」
小一郎「え？」
伸夫「出てこないの？」
　武史、答えない。
真理子「……そうみたい」
小一郎「そっか」
　小一郎、肩を落とす。
　伸夫、小一郎の肩に手を置き、明るく
伸夫「みんなで会おうとすれば、会えるんじゃないか？　いつだっけ、お時も言ってたよな？　みんなで一緒にって」
　真理子、笑顔になって小一郎を見る。
真理子「そうだよ！」
　小一郎、ホッとして笑う。
　真理子、武史を見る。
真理子「武史も。ね？」
　武史、照れくさそうに真理子を見て
武史「お、おう」
伸夫「決まり。じゃあ、今夜」
真理子「暗くなるの早いから、そんなに遅くなくていいよね？」
小一郎「場所は校舎の裏でいいかな」
　武史、少し元気になって
武史「うーん……公園でいいんじゃないか？　あそこにもお時は来るし、小一ちゃんちも近いから、小雪、安心だろ？」

真理子「そうだね」
伸夫「よし。公園。決まり」
小一郎「うん」
　武史、笑顔で小一郎の腹を小突く。
小一郎「やめろよお」
　小一郎、笑って武史に体当たりする。
　武史、吹っ飛んで転ぶ。派手な音。
真理子「あ」
　教室中がシーンとなる。
武史「いててて」
武史、ゆっくり起き上がる。
　小一郎、心配そうに
小一郎「ごめん、武史、大丈夫？」
　武史、ニヤリとして
武史「こーのーやーろー」
　武史、小一郎に飛びかかってプロレスを始める。
　小一郎、笑顔になって応戦する。
　武史と小一郎、伸夫にぶつかり、伸夫よろめく。伸夫も参戦し三つ巴になる。
　真理子、ホッとして微笑む。
　他の生徒達も笑ったり、応援したり。

○通学路（夕）

　両脇に大量に雪が積もっている。
　走る武史、真理子、小一郎、伸夫。

○公園（夜）

　遊具もベンチも雪に埋もれている。
　武史、真理子、小一郎、伸夫、小雪が雪遊びをしている。傍に伸夫の望

遠鏡と畳んだダンボールが数枚置いてある。
他に誰もいない。
武史、動きを止めて
武史「なあ、もっかい呼んでみよ」
伸夫、息を荒くしながら
伸夫「3回やって来なかったんだから、もう今日は来ないぜきっと」
武史「小雪に会わせてやりたいだろー」
伸夫「そりゃあ、まあ」
武史「さ、もっかい、もっかい」
武史、いそいそとマッチ箱を取り出す。
真理子、小一郎、伸夫、小雪、武史の周りに集まる。
真理子「(小声で)自分が会いたいんじゃん」
武史「何か言ったか?」
真理子「何でもない」
武史、慎重にマッチを擦る。火が灯る。
小雪、真剣に火を見つめる。
何も起こらず、火が消える。
小雪「消えた」
武史、真理子、小一郎、伸夫「……」
小雪、ニコニコしながら
小雪「そり遊び!」
武史、申し訳なさそうに
武史「小雪、ごめんな」
小雪「いいから遊ぼ!」
武史、真理子、小一郎、伸夫、小雪の笑顔にホッとする。
小一郎「小雪、楽しい?」
小雪「うん!」

武史、元気よく

武史「よおし、ソリやるぞ！」

武史、ダンボールを拾って駆けていく。

小一郎、小雪を勢いよく抱えて

小一郎「よし、行くぞ！」

小雪「きゃー」

小一郎、武史を追う。

真理子、伸夫、ダンボールを拾って

武史と小一郎を追う。

○同・斜面～夜空（夜）

武史、斜面のてっぺんに現れる。

ダンボールを下敷きに滑り出す。

武史「うおーっ」

小一郎が来て小雪を降ろす。

伸夫が来て小一郎にダンボールを渡す。

小一郎、ダンボールにあぐらをかき、

小雪を乗せて一緒に斜面を滑る。

小雪、歓声を上げる。

伸夫、ダンボールに腹ばいになり滑る。

真理子が到着する。

武史、斜面下から真理子に向かって

武史「早く来いよーっ」

武史、小一郎、伸夫、小雪が手を振る。

真理子、手を振り返して

真理子「今行くーっ」

真理子、ダンボールに乗って勢いよく滑り降りる。

真理子「きゃー」

×　×　×

夢中でそり遊びを繰り返す武史、真理子、小一郎、伸夫、小雪。楽しそう。

×　×　×

雪の上に仰向けで倒れこむ伸夫。

伸夫「だめだー」

武史、伸夫の横に飛び込むように、同じように仰向けになる。

武史「あっちー、汗かいた」

真理子も寝転がる。

真理子「楽しい！　こんな雪の町、初めて」

武史「へえ」

小一郎、フラフラとやってきて

小一郎「疲れたあ」

うつ伏せに倒れこむ。仰向けになると、顔中に雪が付いている。

武史、真理子、伸夫、笑う。小一郎も笑う。

空に星が輝いている。

武史、真理子、小一郎、伸夫「……」

真理子、天を指して

真理子「オリオン座はわかる」

伸夫「シリウス……冬の大三角形……もうちょっと暗くなったら、もっとよく見える」

武史「……お時、お母さんに会えたのかな」

小一郎「どうかなあ」

小一郎、ハッとして起き上がる。

小一郎「小雪？」

武史、真理子、伸夫、起き上がる。

小一郎、立ち上がって辺りを見渡す。

小一郎「小雪？」

小雪、斜面のてっぺんから一人で滑り降りようとしている。
小一郎、小雪を見つけ叫ぶ。
小一郎「小雪！」
小雪、滑り出す。
真理子「あ！」
武史「小雪！」
武史、真理子、小一郎、伸夫、走る。
小雪、勢いよく滑っていく。
武史、真理子、小一郎、伸夫、小雪に向かって走る。
小雪、崖と茂みの方へ向かっていく。
伸夫「危ない！」
小一郎「止まって！」
真理子「間に合わない！」
武史「くそっ！」
小雪の前方にむき出しの岩。
小一郎「（悲痛に）小雪！」
武史、ハッとして
武史「お時、お時ーっ！」
真理子「武史っ？」
武史「お時！　小雪を助けてくれ！　お前しかいない、お時、お時ーっ！」
真理子、小一郎、伸夫「お時！　お時ーっ！」
小雪、猛スピードで岩に近づく。
武史「お時、お時、俺の力を好きなだけお前にやるから！　小雪を助けろ！」
時子の後ろ姿、岩の上にフッと現れる。
真理子「あ！」
時子、振り向いて小雪を見る。
瞳がギラッと輝く。

武史「お時！」
　小雪、岩にぶつかりそうになる。
小一郎「小雪！」
　時子、両手をフワッと上げる。
　小雪、ダンボールごと空に浮かぶ。
小雪「わああ」
　小雪、そのまま空を飛んでいく。
小一郎「え？」
　必死に走る武史の体が、フワッと浮く。
武史「何だ？」
　武史、そのまま宙を走っていく。
武史「うわ、うわ、うわーっ」
　真理子、小一郎、伸夫の体も宙に浮く。
伸夫「すげえ！　すげえ！　すげえ！」
小一郎「小雪、小雪ーっ」
　武史、真理子、小一郎、伸夫、どんどん高く上っていく。
真理子「空を……走ってる！」
　武史、小雪を見つけて
武史「あっちだ！」
　武史、真理子、小一郎、伸夫、小雪の方へ走っていく。どんどん近づき、小雪に合流する。
小一郎「小雪！　大丈夫かっ？」
　小雪、屈託ない笑顔で
小雪「お兄ちゃん、お空を飛んでる！」
小一郎「う、うん、そうだね」
小雪「楽しいね！」
　小一郎、大きく息を吐く。
　武史、小一郎に並走して
武史「助かったな」

小一郎「うん」
　小一郎、足を止める。途端に高度が下がり始める。
武史「ああっ！　バカ！　走れ！」
　小一郎、必死で駆け足。高度を上げる。
小一郎「こゆ、小雪は、楽で、いいね」
小雪「うん！」
　真理子、笑顔になって
真理子「よかった」
　真理子、時子を探して
真理子「お時、ありがとう。あれ、お時？」
　時子、不意に現れる。軽やかに飛んでいる。
真理子「ありがとう」
小一郎「ほんとに、ありがとう」
　武史、嬉しそうに
武史「久しぶりだな」
時子「うん。約束、ありがとう」
武史「え？」
　時子の瞳がギラッと輝く。
　伸夫、空を見上げて
伸夫「星だ、星が近い……あああ」
　武史、足元を指して
武史「下も！」
　真理子、小一郎、伸夫、足元を見る。
真理子、小一郎、伸夫「うわーっ」
　雪化粧の街並み。
小雪「こっちも！　あっちも！」
　小雪、あちこちを指している。
　武史、真理子、小一郎、伸夫、辺りを見渡す。見渡す限りの冬の函館の美しい夜景。西の地平線が少しだけ

まだ赤い。東は真っ暗な夜空に星が輝く。

武史「すごい……」

夜空を駆け抜けていく武史、真理子、小一郎、伸夫、小雪と、時子。

○公園（夜）

空から降りてきてゆっくりと着地する、ダンボールに乗った小雪。

武史、真理子、小一郎、伸夫、降りてきて着地し、雪の上に倒れこむ。

武史「きっつー」

真理子「しんどかったあ」

伸夫、仰向けに寝転がる。

小一郎、息を切らしながら小雪を抱きしめる。

時子がふわりと舞い降りる。

小一郎、小雪を抱いたまま丁寧に頭を下げる。

小一郎「お時、ほんとにありがとう」

伸夫、やっと起き上がりながら

伸夫「今日は俺達の方が力をわけて欲しいぜ」

時子「……」

武史、雪を払いながら立ち上がる。

武史「だめ、約束だから。お時、ほら」

武史、懸命に息を整えながら

武史「力、わけてやるよ」

武史、掌をかざす。

時子、荒い息の武史を見ている。

武史「どうした？」

時子「今日はいい」

武史「遠慮すんなよ。ほら」
　武史、時子に向かって掌を差し出す。
　時子、微笑んで
時子「いいの。その代わり、三月二十一日に、もう一度会って」
武史「三月二十一日？」
時子「うん。もう充分だったんだけど、今日少し使っちゃったから。また会って、力をわけて」
　真理子も立ち上がる。
真理子「その日に何があるの？」
時子「お母さんに会えるの」
小一郎「そうなんだ！　よかったね！」
時子「うん！　だから、その時、手伝って」
武史「よし、任せとけ」
時子「力を、ちょうだい」
武史「わかった」
時子「約束」
武史「おう。約束」
　時子の姿、消え始める。
　武史、慌てて
武史「公園でいいのかよっ？」
　時子の姿、完全に消える。
時子の声「小学校で！」
　武史、息を一つ吐いて
武史「別れ際があっさりし過ぎなんだよな」
真理子「どうして三月二十一日なのかな」
小一郎「春分の日？」
小雪「しゅんしゅんのひ？」
伸夫「しゅん、ぶん、の日。昼と夜の長さが一緒なんだ」
武史「じゃあ、よくわかんないけど、特別

な日なんだ」
小一郎「そうだね」
真理子「でも、それって、お母さんとどう
いう関係なの？」
武史「俺に聞くなよ」
伸夫「ちょっと待て。今年の春分の日は三
月二十日」
小一郎「あ、そうなんだ」
伸夫「二十一日って、もういっこ何かあっ
たよな。何の日だっけ」
小雪の腹がグウと鳴る。
小一郎、小雪を背負って
小一郎「小雪、帰ろう」
小雪「うん」
小一郎、武史、真理子、伸夫に
小一郎「ありがとう」
伸夫、斜に構えて
伸夫「よせよ」
真理子、小雪に触れて
真理子「よかったね。楽しかったね」
小雪「うん！」
小一郎「みんな、ありがとう」
武史「うん」
真理子「またね」
小一郎、小雪を背負ったまま去る。
伸夫、望遠鏡を担いで去る。
真理子、去り際に一度武史の方を振
り返り、手を振ってから去る。
武史、手を振り返す。
武史「……」
武史、空を見上げる。
武史「さっきまで、あそこに……」

武史、手を伸ばす。

武史「……」

武史、ゆっくり手を下ろし、ゆっくり歩いて去っていく。

○町・実景（朝）

夜が明ける。朝日が町を照らす。

函館市で暮らす人々の姿。日常。

×　×　×

3月の日めくりカレンダー。

どんどんめくれていく。

○小学校・教室

吉川がプリントを配っている。

吉川「もうすぐ春休みだぞー。嬉しいか？」

生徒達「嬉しいっ！」

吉川、笑って

吉川「元気だなあ」

吉川、プリントを配り終わり、教壇に立って

吉川「さて、今度の連休は、どうして休みなのかな？」

伸夫、手を上げる。吉川、当てる。

伸夫「春分の日です」

吉川「そうだな。でもこの時期、函館にはもう一日、大事な日がある」

吉川、生徒達を見回す。黙る生徒達。

吉川「三月二十一日だ」

武史、真理子、小一郎、伸夫、ハッとしてお互いを見つめ合う。

真理子、手を上げる。

真理子「先生」

吉川「何だ？」
真理子「三月二十一日って、何の日ですか？」
　吉川、少し改まって
吉川「そうか、杉田は引っ越してきたから知らないか」
　生徒B、手を上げる。吉川、当てる。
生徒B「函館大火の火です」
　吉川、大きくうなずく。
伸夫「あ、そうだった」
真理子「函館、たいか？」
　吉川、日付を板書する。
『昭和九年三月二十一日』
吉川「ちょうど五十年前だ」
武史「……」
×　×　×
最初にあった時の、時子のボサボサの髪とボロボロの着物。
×　×　×
武史「……」
　小一郎、武史を見つめる。
小一郎「……」
吉川「昔、函館は火事の多い町でな。函館の道は随分広いだろ？　あれは建物から建物へ火が燃え移るのを防ぐためだったんだ」
武史「……」

○函館大火の資料

　写真、文献など。
吉川の声「火災の発生は火が沈んだ直後、夜の七時前。二千人を超える人が亡くなって、重軽傷者は一万人近い」

真理子の声「ひどい……」
吉川の声「最初は強い風で一軒の住宅が倒れて燃えたことから始まった。それがあっという間に燃え広がって、市内の三分の一が燃えてしまった」

○小学校・教室

生徒達、静かにしている。
武史「……」
吉川「函館大火はお前達にも無関係じゃない」
吉川、教室の壁を叩く。
吉川「この学校はな、明治15年からあるんだ。大火の後、復興のシンボルの一つとして、立派に再建されたんだぞ」
真理子「へええ」
小一郎「（小声で）お母さんに会える日……」
武史「……」

○慰霊堂（朝）

函館大火の慰霊祭が行われている。

○メディア情報の点描

家庭や病院の受付など、様々な場所のテレビに映る、慰霊祭や大火、函館の都市計画についての映像。新聞やネットニュース上の大火に関する見出し、解説など。

○町・実景（夕）

日が沈む。町に灯りが灯り始める。

○小学校・外観（夜）

○同・職員室（夜）

吉川が机の整理をしている。他に誰もいない。吉川の机、際立って散乱し、本や書類が積み上がっている。

本の山が崩れて、更に散乱する。

吉川「ったく」

ドアが開く音。

用務員（69）が入って来る。

用務員「ああ、よかった」

吉川「ああ、こんばんは」

用務員、慌てて吉川に近づき

用務員「吉川先生、急で大変申し訳ありませんが、当直、代わって下さいませんか？」

吉川「え？」

用務員「家内の具合が急におかしくなったみたいで、ちょっと、戻らにゃいかんのです」

吉川、快く

吉川「そりゃ大変です。どうぞどうぞ、行って下さい」

用務員、頭を何度も下げて

用務員「すみません、助かります。業務リスト、用務員室にありますんで、あ」

用務員、吉川に鍵を渡す。

吉川「了解です。さ、早く行ったげて下さい」

用務員「ありがとうございます。すみません」

用務員、慌てて出て行く。

吉川「……」

吉川、散らかり放題の机を見る。軽く首を横に振り、大きく伸びをする。

吉川「気分転換に散歩でもするかあ……いやいや、散歩じゃない。見回り、見回り、と」

吉川、出て行く。

○同・校舎裏（夜）

武史、マッチ箱を握りしめ、空を見ながら立っている。

武史「……」

小一郎と伸夫が来る。伸夫、手ぶら。

武史、小一郎と伸夫を見る。

小一郎「待った？」

武史「ううん」

小一郎「小雪は置いてきた」

武史「うん。望遠鏡は？」

伸夫「置いてきた。親に怒られたよ。天体観測もいいけど、勉強しなきゃ学者になれないって」

真理子、慌ててやってくる。

真理子「ごめん、待った？」

武史「大丈夫」

真理子「出るの大変だった。不良と付き合ってんじゃないかってしつこくって！伸夫んちに電話してほんとに天体観測してるのか確認されちゃった。ごめんね伸夫」

伸夫「いいよ。俺も怒られてきたとこ」

真理子「そっか……もう、こんな時間、そんなに集まれないかもね」

武史、真理子、小一郎、伸夫、黙ってうつむく。

武史、顔を上げて、静かに

武史「始めよっか」

小一郎「うん」

武史、マッチ棒を一本取り出し、そっとマッチを擦る。

炎が揺れて、時子が現れる。

武史、思い切って

武史「お時、お前、函館大火で死んだのか？」

時子、微笑む。

伸夫「お母さんも？」

時子、更に微笑む。

武史、時子に見とれて、小さく笑って

武史「……まあいいや」

武史、マッチ箱をポケットにねじ込んでから、掌を時子に向けて差し出す。

武史「俺の力、好きなだけ持ってけよ。そう、約束したもんな」

小一郎「いつ約束したの？」

武史「小雪を助けてもらう代わりに」

時子の瞳がギラッと輝く。

小一郎「そうだったの？　だめだよ、だったら、僕の力を持ってってよ！」

小一郎、掌を時子に差し出す。

武史、小一郎を押しのける。

武史「いいんだよ、俺が勝手に約束したんだから。ほら、お時、早く！」

時子、うなずいて、伸夫を見る。

伸夫「？」

時子「もう一本、火をつけて」

伸夫「え？　マッチってこと？」

時子「早く」

武史、ポケットからマッチ箱を取り

出し、伸夫に投げる。
伸夫、火をつけようとするがもたつく。
時子、鬼気迫る表情になり
時子「（声を荒げて）早く！」
武史、真理子、小一郎、ゾッとする。
×　×　×
吉川、ぶらぶら歩いている。
武史の声「大丈夫か？」
伸夫の声「うん」
吉川「？」
吉川、声の聞こえる方へ向かう。
×　×　×
伸夫、何とかマッチに火をつける。
伸夫「ついた」
伸夫、燃えるマッチを時子に差し出す。
時子、マッチを受け取ろうとする。
吉川、やってくる。火を見て
吉川「あっ」
武史、真理子、小一郎、伸夫、吉川を見る。
伸夫「やばい！」
吉川、走って向かってくる。
吉川「何やってんだお前ら！」
武史「お時、何やるのか知らないけど早く！早くやれ！」
時子、伸夫の手から燃えるマッチを奪う。時子の瞳が真っ赤になる。
真理子、ゾッとする。
武史、時子の空いてる手を取り、自分の掌に重ねようとする。

武史「俺の力、もってけ！」
真理子「だめっ！」
　真理子、武史の手を掴んで妨害する。
武史「放せよ！」
　吉川、すぐそばに来る。
吉川「こらっ！」
　武史、真理子を突き飛ばし、時子と掌を合わせる。時子の髪が逆立ち、マッチの炎が巨大に膨れ上がる。
　吉川、立ち止まって炎を見上げる。
吉川「ああっ！」
　巨大な炎が渦を巻き、時子と武史を包む。真理子、小一郎、伸夫、炎の勢いに吹き飛ばされ、吉川の足元に転がる。
　吉川、急いで助ける。
吉川「大丈夫かっ」
小一郎「武史が、中に！」
　小一郎、起き上がって炎に飛び込む。
吉川「あっ！　ばかっ！　宮部っ！」
　伸夫、起き上がって炎に飛び込む。
吉川「石黒っ！」
　真理子、起き上がって吉川を見る。
　吉川、真理子を見て、炎を見る。
吉川「ええい、くそっ！」
　吉川、炎に飛び込む。真理子、すぐ後に続いて飛び込む。
　武史、炎の中で、取り囲む炎の壁を見つめている。
　武史、時子と目が合う。
　時子の瞳、真っ赤に輝き、異様な形相。
武史「……」

時子「さあ、力をちょうだい。お母さんを、呼ぶの」

武史、魅入られてうなずく。

時子、武史の掌をギュッと握る。

武史、ブルっと震える。

時子、大きく体をよじる。

函館大火の幻影が現れる。

武史、目を見張る。

風にあおられて荒れ狂う炎。

炎に巻かれ倒れていく人々。

家屋が崩れ、下敷きになる人々。

悲鳴。怒号。

武史「ああっ」

時子、鬼の形相で母を探す。

時子「どこ！　どこ！」

時子、武史を睨みつける。

時子「もっと、力を！」

時子、顔をグッと武史に近づける。

時子の口が裂け、鬼の形相になる。

武史、思わず逃げようとする。

時子、武史の手をねじり上げる。

武史「痛えええっ」

時子「さあ、力をよこせっ！」

炎の壁から小一郎が飛び出してきて、武史に体当たりする。

吹っ飛ぶ武史。

小一郎「武史！」

時子「邪魔するな！」

小一郎、武史に駆け寄り、抱き起こす。

小一郎「大丈夫？」

武史「小一ちゃん……痛ってえ」

時子の着物が燃え始める。

時子、ハッとして武史と小一郎を睨む。

時子「力を……力を、よこせっ！」

時子、武史と小一郎に飛びかかろうとする。伸夫、炎の壁から飛び出してきて時子にぶつかる。よろめく時子。体勢を整えたところに真理子が飛び出してきてぶつかる。時子、倒れる。

武史「伸夫！　真理子！」

吉川、炎の壁から出てきて

吉川「お前ら！　大丈夫かっ」

武史「先生！」

吉川、腕を伸ばして武史、真理子、小一郎、伸夫を抱え込み、守ろうとする。

時子の髪が燃え始める。

真理子「お時が……燃えてる！」

時子「力を……早く……」

時子の皮膚が溶け始める。

武史「ああっ」

函館大火の幻影が炎に飲み込まれ、渦を巻いて時子の周りをぐるぐる回る。

時子「熱い……熱い……お母さん……」

武史、真理子、小一郎、伸夫、吉川、無言で時子をジッと見つめる。

突然、渦巻く炎が反転し、時子を襲う。

時子「ぎゃあああ」

吉川、とっさに子供達の顔を伏せさせ、精一杯覆いかぶさる。

時子、炎に焼かれて燃えつきる。

吉川、轟音と渦巻く気流に耐える。
炎が消え、風が止み、静かになる。
吉川、そっと顔を上げる。
いつもと同じ、静かな風景。

吉川「……」
吉川、力を抜く。
武史、真理子、小一郎、伸夫、そっと顔を上げ、辺りを見る。
吉川、ゆっくり立ち上がる。
武史、真理子、小一郎、伸夫も立つ。

武史「……」
伸夫「幻……」
真理子、吉川と目が合う。
吉川「たっぷり説明してもらわんとな」
真理子「……」
小一郎、そっと武史に寄り添う。
武史、空を見上げる。満天の星空。

武史「……」
（回想終わり）

○個人病院・個室（夕）

窓から夕日が射している。
岡崎武史（40）、シーツの奥でジッと目を見開いている。

武史「……」
東野智之（26）、ぽかんと口を開けて突っ立っている。
東野「天使じゃなかったんだ」
杉田真理子（40）、吹き出して
真理子「一言もそんなこと言ってないけど」
東野、脱力して座り込む。
東野「話がすごすぎて」

宮部小一郎（40）、うなずく。

小一郎「確かに」

東野「そんなすごい体験して、その後よく普通に生活してこれましたね……あ」

東野、バツの悪い顔をする。

沈黙。

石黒伸夫（40）、壁にもたれたまま

伸夫「俺は天文学者になりたかった。でも大学受験に失敗して、就職も希望通りにならず、何度か転職して、今は仙台の小さな製造メーカーで働いている。これは、お時のせいかな」

東野、うつむく。

真理子「私はあの後すぐに親の転勤で引っ越したの。何度も、何度も。就職したら仕事一筋。仕事以外の時間、どうしたらいいのか、わからなくなったわ。そしたら去年リストラ対象になって、孫会社に無理やり出向。今、何も楽しくないの。これもお時のせいかしら」

伸夫、小一郎を見て

伸夫「そうか。小一ちゃんは今、幸せに暮らしてるか」

小一郎、小さく首を振る。

小一郎「自分が幸せかどうか、わからない。ただ、普通だよ。毎日働いて、それほど多くは稼げなくて、親がいて、子供がいて」

小一郎、立ち上がり、武史を見る。

小一郎「気付いたら一日が終わってて、しばらくして気付いたら、一年が終わってて、そうして、いつのまにか、こんなおっさんになってた。ただ、それだけ」

小一郎、武史のシーツをめくる。
東野「あ」
真理子・伸夫「……」
武史、動かない。
小一郎「人のせいにしちゃいけない。そりゃ、自分一人ではどうしようもないこともあるよ。でも」
小一郎、そっと武史の背に手を置く。
小一郎「受け入れなきゃ。不都合な現実でも」
伸夫も、武史の脇に座る。
伸夫「小一ちゃんは、偉いよ。早くからそれに気付いてた。高望みしないで、目の前の現実を認めて、受け入れてた」
伸夫、武史をゆっくり抱き起こす。
武史、抵抗しない。
小一郎「お時の思い出は、強烈だよ。あれ以上強い体験なんて、大人になってから一度もない。でも、子供時代って、結局どれもそういうもんじゃないかな」
伸夫、武史の背中をゆっくり撫でる。
伸夫「思い通りに、ならないよな。子供ん時みたいに、輝かないよな。どんどん毎日が、くすんでいくよな。大人になると」
東野、泣き始める。
真理子、小一郎、伸夫、呆れて笑う。
伸夫、武史を抱きしめる。
伸夫「俺だって、何一つ思い通りにいってないんだぜ。それでも、生きてるんだ」
小一郎も武史の横に座り、肩を抱く。
小一郎「背中向けたら、そこで終わっちゃう」
真理子、ハッとする。

× × ×

（フラッシュバック）
杉田真理子（10）を睨みつける岡崎武史（10）。
武史「俺のことなんかほっとけよ」
武史、真理子に背を向けて雪の上に寝転がる。
真理子「……」
×　×　×
真理子「……」
武史「……もう……終わってる」
小一郎、力強く武史を揺する。
小一郎「まだだ。まだ終わってない」
東野「……始めて喋った」
伸夫、ふと東野を見て
伸夫「そういや、こんなに長い間ここにいていいのかい？　仕事は？」
東野、ハッとして腕時計を見て、あんぐりと口を開ける。
真理子「ここにいちゃ、いけなかったのね」
東野、慌てて身支度して、封筒を手に取り、考える。
東野、武史に近寄り、強引に封筒を手に取らせる。
東野「僕なんか、何にも偉そうに言えないんですけど、何ていうか、その」
東野、勢い良く礼をする。
東野「ありがとうございます！　では！」
東野、急いで出て行く。呆気にとられる武史、真理子、小一郎、伸夫。
真理子「まあ……悪い子じゃなさそうね」
武史、微かに表情を和らげ
武史「外の空気が吸いたい」

武史、ゆっくり立ち上がる。
小一郎と伸夫が脇から支える。

○個人病院・ベランダ（夕）

あかね色に染まっている景色。
武史を中心に真理子、小一郎、伸夫、出てきて景色を見渡す。

真理子「悪くない」
武史、脇を支える小一郎と伸夫をやんわり制し、一人でベランダの端まで歩く。見守る真理子、小一郎、伸夫。
武史、景色を見つめる。
武史「俺はあの頃から何にも変わってない」
小一郎「悪いことじゃない」
武史「現実に大して不満ばかり感じて……
将来に対しては、出来もしない妄想ばかり描いてた」
伸夫「俺だってそうさ」
武史「もう一度、空を飛びたかった」
真理子「私だって」
武史「何もかも、無駄にしてしまった」
小一郎「まだ終わってない」
武史、ため息をつく。
武史「あれは、何だったんだ？　どんな意味があるんだ？」
真理子、武史に近づき、背に触れる。
武史「俺達に何を伝えたかった？　函館大火のことか？　大勢の人が死んだから、ちゃんと生きろとでも？　余計なお世話だ」
真理子、うつむく。
小一郎「交通事故みたいなもん、かな」

武史、小一郎をチラッと振り返る。
小一郎「大して意味なんてないんだよ。火事で亡くなった人たちも、突然巻き込まれたんだ。どうしようもなかったんだ」
武史、場所を少し移動し、真理子の手から離れる。
真理子、動かない。
真理子「……」
小一郎「何が起こるか、どんな意味があるのか、なんて、考えても仕方ないよ。僕はどうして場末の食堂の長男に生まれたのかなんて、いくら考えても答えはなかった」
真理子、武史の背に当てていた自分の掌をジッと見つめる。
伸夫「きっと、起こってしまったことをどう消化して、意味を作っていくのかが、大切なことなんじゃないか」
武史、顔を歪める。
武史「悟ったようなこと、言うじゃないか」
伸夫、苦笑して
伸夫「失敗から学んだのさ。成功は、まだ一度もない」
武史「どうせ……今更、もうだめだ……労多くして喜びはない」
真理子、小一郎、伸夫「……」
伸夫、小さく吹き出す。
武史、真理子、小一郎、伸夫を見る。
伸夫「ごめん、ごめん。だって、急に格言めいたことというからさ。労多くしてって」
伸夫の屈託ない笑顔。
武史、伸夫につられて少し微笑む。

武史「もうおっさんだぞ。それなりのことは言う」
伸夫「お互い年取ったよなあ」
小一郎「何だよ、結構な爺さんみたいな言い方だなあ」
武史、真理子、小一郎、伸夫、笑う。
真理子「……」
真理子、武史に近づき、そっと掌を差し出す。
武史「……」
真理子、微笑んでうなずく。
武史、弱々しく首を横に振る。
武史「こんな……今のこんな……俺じゃあ」
真理子も首を横に振り、武史の手をとって自分の掌に重ねる。
真理子「お時は奪うだけだった。私達は、分け合える」
武史、こらえきれずうつむく。
真理子「非業の死を遂げた人の姿を、私達は確かに見た。でも私達は、生きている。できることは、しなければ」
武史、うつむいたまま涙をこぼす。
真理子「まだ、終わりではないわ。励ましたいんじゃない。私も今、励まされたの。力は分け合えるんだって、気づいたから」
小一郎と伸夫、武史のそばに寄る。
武史、うつむいたまま、絞り出すような声で
武史「助けてほしい」
真理子、武史を抱きしめる。小一郎と伸夫、武史と真理子を抱きしめる。
円陣を組むように強く抱きしめ合う。

真理子、しばらくして

真理子「武史」

武史「(涙声で) 何だ?」

真理子「やっぱり、ちょっと臭い」

武史「(涙声で) ホームレスに多くを求めるな」

小一郎「怪我治ったら温泉行こう」

伸夫「いいねえ。函館は温泉の町」

小一郎「真理子も伸夫も、戻ってきたら?」

伸夫「そうしようかな」

真理子「そうねー。武史がバリバリ働く姿を見届けなきゃ」

武史「(涙声で) お前が結婚できない理由はそういうとこなんだ」

真理子「できないんじゃなくて、しないの」

武史、真理子、小一郎、伸夫、抱きしめ合ったまま笑う。

武史、顔を上げる。真理子、小一郎、伸夫も顔を上げる。

武史、真理子、小一郎、伸夫の顔を、順にゆっくり、しっかり、見つめる。

武史「ありがとう」

一層強く抱きしめ合う武史、真理子、小一郎、伸夫。

夕日が美しく包み込んでいる。

《おわり》

本電子書籍は、2015 年 12 月 4 日発行の『第 21 回函館港イルミナシオン映画祭 2015 第 19 回シナリオ大賞・受賞作シナリオ集』より、函館市長賞〔グランプリ〕受賞作品を抜粋したものです。
シナリオ集のお求めや、作品の映像化につきましては、本映画祭函館事務局までお問い合わせください。

第 21 回函館港イルミナシオン映画祭 2015
第 19 回シナリオ大賞 函館市長賞〔グランプリ〕受賞作品

時子

作：よしおよしたか

※本作品の無許可掲載・転用を禁止します

2016 年 2 月 1 日　電子書籍版発行
発行：函館港イルミナシオン映画祭実行委員会 函館事務局
〒 040-0055 函館市末広町 4 番 19 号（函館市地域交流まちづくりセンター内）
電話　0138-22-1037　http://hakodate-illumina.com/
制作：株式会社新函館ライブラリ
〒 040-0051 函館市弁天町 4 番 8 号
電話　0138-84-1620　http://www.nhakodate.com/